

## 万年青

池松 孝子

万年青は、その漢字が示すように一年中褪せせず青い。赤い実と緑の葉の対象は高貴でさえある。徳川家康が江戸城に入城した際、それを祝して万年青を献上した家臣がいたということからもすでに縁起の良い植物だったことがわかる。そんな由来からか、今も骨董屋で「万年青鉢」といって高級な植木鉢を目にすることがある。

万年青は古典植物としての歴史をもっている。江戸時代、主に大名のもとで栽培が行われた。元禄から享保年間には、葉の変形したもの、斑入りのものなど栽培技術も進み庶民にも広まった。江戸時代後期には、利殖の対象にもなったらしい。そのころ、下級武士の間では「笠張り」ならぬ「万年青栽培」も盛んで、それが大いに生活の足しになったという。さらに明治の初め、京都で大変な万年青ブームが起こった。その果てには「一鉢千円」とまで言われた。現代の価値にすると数千万円以上というから驚きだ。

昔のこと、結婚の荷物の中に母から万年青一鉢を持たされた。引越先では、どの荷物よりも先に万年青を取り出して、家の中心になる部屋の真ん中に置くようにと念を押された。引越先でもお金に困らないということだったが。

福岡に住んでいた時、何度か英彦山に登った。国定公園耶馬日田英彦山である。英彦山神宮にお参りして下山の途中、葉が茶色に傷んだ万年青の一群を見つけた。リュックから細長いポテトチップスの筒を取り出し、その中に万年青一株を入れた。子供には「花泥棒は泥棒じゃない」と言い訳をしながら。それから東京に戻った時も、その後の引越しの時もいつも一緒だった。思い入れもあつてか、万年青は見事に増え、堀に沿って緑のベルトのように増殖していった。

先日、お向かいの息子さんが結婚、独立されるため引越しの挨拶に見えた。その時、我が家の万年青を一株ほしいということ喜んで差し上げたのだが、その御利益はあつたらうか。